

【『琅』三十九号・あとがき】

この夏から秋にかけて、人の命とその儂さについて考える機会がいくつかあった。

定年後に通っている語学学校の教科書に、興味深い教材があった。十九世紀のキューバに生まれ、幼少期からフランスで生活し、後にカール・マルクスの次女と結婚したポール・ラファルグという人物に関する文章である。彼は、政府に盾突いてフランスを追われたり、パリコミューンに参画したり、地方都市の議員を務めたりと、言わば波瀾万丈の人生を過ごしてきたような人物である。教科書には、夫妻の最期についてきたような一文が載っている。「ラファルグ夫妻は、一九一一年十一月二十六日、無情な老いの到来を避けるべく、自らの命を絶った」（享年69歳）。今の私よりも、わずかに若い年齢でのことであった。

この教材で、老いの無情さについて少し考えてみたいと思っていたが、若い先生は、このようなテーマは好みではないらしく、この文章を授業で扱うことはなかった。「無情」な状態に陥ったときには、最早、自分で自分を始末できなくなっているだろうと思うので、何とも気になる文章だった。若い人たちの多い授業では、先生の判断は致し方のないところだったろう。

この文章を読んだ直後、老いの無情さを身近な出来事として体験することになった。個人的な話で恐縮である。

この春まで、買い物も料理も一人でやっていた母（九十七歳）が体調を崩し、救急車で病院に運ばれることになった。高齢になって一度床に就くと、老化が急激に進行すると言われるが、まさにその通りであった。足腰が弱まったばかりでなく、記憶力や判断力にも変動が目立ってきた。会話は概ね正常に成り立っているが、しばしば思わぬ方向へ展開する。自分が娘時代に住んでいた所を思い出すのか、

そこへ帰ると言い出す、用があったらこのボタンを押すようにと紙に書いて貼っておいても、読まないか、読んだとしても指示通りに出来ない、家から一歩も出ていないのに、駅で知り合いに会ったと言ったりする等々、半ば夢の中にいるような日々を送っている。

こうした実母の状況に追い打ちをかけるように、近くに住む義母（九十三歳）が入院することになった。数年前の病が再発したもので、こちらも救急車で運ばれた。頭部に開わる疾病なので心配したが、幸いなことに認知症の症状は見られず一安心だが、その分、本人は「無情な老い」に陥りつつあることを実感しているのではないかと複雑な気持ちになる。

今、超高齢の二人の母は、人生最後の勤めとして、子どもたちに、年を取るのはどういふことかということをも、身をもって教えてくれているような気がする。

実母・義母の入院で右往左往している最中に、語学学校の同級生（おそらく私と同年配の女性）が亡くなったという知らせを受けた。この春以来導入されてきたオンライン授業の画面に、遺族からの通知が掲示されたのである。この人とは、一週間前まで授業を共にしてきたのであった。謹んでお悔やみを申しあげる次第である。

（茂治）

（次号原稿締め切り日） 二〇二二年三月末日

『琅』三十九号 二〇二〇年十二月 発行

編集・発行人 松村 茂治

発行所 252-0143 神奈川県相模原市緑区橋本5-26-19

「琅の会」 TEL (042-773-1592)

印刷所 株式会社ポプルス